

刀劍乱夢 短編 3

紺杜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

刀剣乱舞の刀剣男士が、not審神者の現代の家に訪れる話です。

目次

第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
90	79	67	49	38	28	12	1

第1話

朝早くお腹が空いて目が覚めた。初夏に入った頃だけに今日も夏日だぜとばかりに早起きの蝉の歌声が窓の外で響き渡っている。蝉、早起きだな。今何時だろうと手を伸ばしてベッドから辺りにあるはずの目覚まし時計を探るり当て、引き寄せると上部ボタンを押し蛍光ランプに浮かび上がる数字を目をしょぼつかせながら見つめた。午前4時。時計の淡い緑色の光が消えると団地間取りで狭い6畳の部屋の中は、すでにカーテン越しに薄つすらと白んだ光が入ってきている。

今日はせっかくの休みなのだ。休日惰眠を貪る予定なのだ。もう一度寝ようとタオルケットを引き寄せたが、お腹が否というようにぐうぐうとなる。お腹が空きすぎて目が覚めるなんて、子供みたいだ。空腹感に負けて、むっくりと起き上がる。今度こそしっかりと目で部屋を見つめると、あちらこちら脱ぎ散らかした衣類が散乱している。とつても女性の部屋には見えない。

仕事が繁期だけに、遅くまで残業でいつも玄関開けたら風呂に入り寝るだけで洗濯溜まり放題。で、最近朝はいつもこんな感じだ。薄明りの中一つ一つ脱ぎ散らかした衣類を集めながら歩き、向かい側の洗面所へ行きネットに入れると洗濯機に放り込んだ。

溜まった洗濯物の何とも言えない汗臭い臭いというか加齢臭がする。洗剤を入れて大急ぎで蓋をしてタイマーをセット。今の時間では近所迷惑になるし、あとでやろうと思っていると忘れてしまうこともあるので。セットしておいて、タイマー音が鳴ったて時間になれば干せばいい。

その間中お腹はフルオーケストラの様に鳴り響く。

一人暮らして本当によかった。妹が居たら、お姉ちゃん可笑しすぎると大笑いされたことだろう。

実家では二人ひと部屋で始終顔を合わせていた一つ下の妹の顔をお思い出して懐かしさに目を細めた。そろそろ夏休みだから、一人部屋になったあの部屋でごろごろしているのかもしれない。

引越した時は、ここは借り手がかなりすぐ変わる物件だと聞いたが、幽霊とか借主が亡くなったとかでもないのに、借主がこの部屋に帰れなくなるらしい事故物件なのだ聞いた。引越しを決めるとすんなり帰る事が出来たと、大家さんに言われた。

私はそんなことは1度もなくこの部屋かえれているから部屋に好かれたのだ

ろうと言われたっけ。

顔をも洗わずに朝食にするのは少し気が引けて洗面所で早々に歯磨きと顔を洗うとパジャマのまま廊下の奥にある台所に向かった。

そういえば昨日昼ご飯に作ったカボチャのグラタンが多すぎてもう一つグラタン皿に入れたままだ。料理番組みてたら美味しそうで材料がちょうどあったんで作ってみたんだけど、かなり美味しかった。あれはリピ決定だな。思い出すとお腹がまたぐうっとなった。あれなら朝からいける気がする。

台所のドアを開けて中に入る。シンクが見えたが昨日の洗い物がそのままだ。あれはグラタン食べてから洗おう。そうしよう。

そう思いつつ、台所のガラスの嵌った引き戸のすぐ脇にある冷蔵庫を開けると近くにあった大学芋を摘まむ。これは三日前に作ったのでそろそろ賞味期限的にヤバイ。食べきってしまわないとなあ。大学芋で、ちよつと小腹が満たされお腹の音は泣き止んだ。

「大学芋もいい味出してるけど、やっぱりメインはこつちだよな」

手前に入っていたカボチャのグラタンを出しつつ、横にあるオープンに入れようとして。

カチャリと台所の扉のあく音の先に人の気配。

え？ え？

びっくりして振り返った。

泥棒???

本当に驚いたときには悲鳴も出ない。声なんかもつとでない。

台所の扉の前に立っていたのは、中学生ぐらいの少年だった。

白い肌。蜂蜜色の瞳。ジャージような服。短パンを着た少年が、蜂蜜色の瞳でこちらを見てた。

蜂蜜色の瞳なんて、人類で見たことない。

カラーコンタクトだとしても、あまりにも似ていて。

もしかして。もしかしなくても。

太鼓鐘貞宗のそっくりさん？

この人はとうらぶにでてくる太鼓鐘貞宗の服装に容姿。まるでイラストから抜け出てきたような。どっからどうみても太鼓鐘貞宗だ。

ちよつと待つて。

自分の家の台所に刀剣男士がいるなんてありえない。

これって夢？

夢なの？

そういえば、昨日ずっと刀剣乱舞の逆トリップの創作を読んでいた。

そのまま寝落ちしたせいで、こんな夢を見ているのだろうか。

ありそう。

きつと、貞ちゃんが自分の台所に現れるっていう夢に違いない。

「ハハ、どこだ？ あんただれだ？」

声までそっくりだった。

当たり前か。

だって私の夢なんだから。

彼も私同様に驚いて、目を見開きながらこちらを見ているが、訝しむ様子も警戒する様子もない。

ふつう身の危険や不審人物がいたら警戒すると思うのに、なぜか初対面だというのに私を親しみのこもった感じだ。目が合う。と、まるで見知っている間柄のように、彼はにつかつと太陽のような画面越しに見える笑顔で私を嬉しそうに見つめた。

さすが夢だ。

「ここは私の家で、私はここに住んでる人間だよ」

刀剣男士に名前を言っではいけない。

夢なので、いつてもいいかと思うけれども。もしもってこともあるし。

「えー。じゃあ、ここ、本丸の厨房じゃねえのかあ？」

きよろきよろと状況を確認するように狭い台所を見渡されてしまって、夢なんだから綺麗なキッチンっていう設定でもいいのに、いつもの狭いキッチンに昨日洗い物そのまままで寝たので汚れた食器がシンクの中で水に浸かっている。それらをぐるりと見渡し

ている彼の目が、私の持つているグラタンに注がれる。

「これって、なんだ？」

「グラタンだよ」

「ぐらたん？」

「そうだよ」

「へえ。これって西洋料理なんだよな？ 美味そう」

貞ちゃんはグラタンを知らないみたいだった。かぼちやのグラタン。なんだか、ラップかけてあるのにチーズの香りがほんのり香。

戸惑いながらも貞ちゃんにグラタン皿を差し出して見せた。

「貞ちゃん食べてみる？ これオーブンで15分ぐらい焼いて、チーズがぐつつぐつつ行ってきたら出来上がり。昨日食べたけれど美味しかったよ」

彼がへえつといいながら、グラタン皿を私の手から受け取る。

「あんたが作ったの？」

「うん。そうだよ」

「へえええ。すごいなあ。こういうのって外国料理で難しいんだろ？」

「簡単だよ。作り方教えようか？」

「いや。主が西洋料理好きじゃなくって、食べてみたいけど……」

「主さん？」

「うん。俺の主さん。和食が好きなんだって。みつちゃんが言ってる、だからおむらいすとかすばげっていか万屋で看板看るけど食べたことないんだ」

「そう、なんだ」

この太鼓金貞宗には主さんがいるのか。

夢なのに、こういう場合私が主でゲームの中から会いに来たとかじゃないの？

自分のゲームの刀剣男士かと思っていた分ちよつと、つていうよりも、かなり、がっかりだった。

彼は私の反応をどう見たのか、グラタンが食べてもらえないからがっかりと映ったのかもしれない。

大慌てで、私の顔を覗き込んで励ます様になつこり笑う。

「あ、そうだ」

彼はカボチャのグラタンを持ちながら上目遣いで私を見つめた。

「これ、持って行ってもいい？」

「うん？」

「主に見せて食べていいって言ったら食べようかと思つて」

にと笑顔で言うつてところはホワイト本丸の良い審神者さんらしい。

「こんな食べ物初めてみつかからさ。みつちゃんにも見せたいんだ。持つて行つてもいい？」

「いいよ。じゃあ、このままじゃなんだし。タッパーに入れるね。あ、オーブンで焼く時はラップは取つて180度ぐらいで15分だからね？」

「分かつたぜ」

私の後ろでラップかけたグラタン皿を待つてもらいながら、台所のシンク下の棚をガサゴソと漁る。どうしてこういうときにちゃんと整理整頓をしておかなかつたんだろう。

グラタン皿が入りそうなタッパーを見つけて、これだと持つて振り返つた。

「貞ちゃん？」

いなかつた。だれも。

え？ え？

「夢だけに、突然消えるっていうパターンの夢だったってこと？」
台所に自分の声だけが響く。

手に持っているタッパーは嫌に現実っぽく、使い古したいつもの白いタッパーだ。

「いかん。これは夢だ。疲れすぎてるんだ。きつと。もう一度寝ようしよう」
夢の中で夢だから寝ようというのはおかしいんだろうと思うけれども。
でも、なんか怖い。

だって、夢じゃなかったら幽霊ってことになるじゃないか。

寝室へ戻ると布団をかぶる。

あれは夢だ。

幽霊じゃなくて夢だ。

きつといい夢だったから。寝たら続きが見れるかもしれない。

その時は伊達組全員集合だ。

夢の中で夢の続きを見ようとしているなんて不思議だけれど。

それでも。

夢だしたら。

刀剣男士の出てくる、現パロの夢なんて初めてだ。

そういえば、パソコンがかなり変な落としていたけれど。壊れる前のような変な音。
私、起動したっけ？

きつとこれも夢だと思うことにする。

第2話

今朝は変な夢を見たもんだ。

でも、まさか本当だったたり？ そう思いながら、洗濯層には干すだけになった洗濯物が大量に出来上がっていて。

まさか、と思い、台所へ直行し冷蔵庫を開けると、昨日の昼の残りのカボチャのグラタンは跡形も無くなっていた。

え？

マジで？

太鼓金貞宗が来ていたって。

あれって、まさか。

夢でも幽霊でなくて。

正真正銘。現実で。

リアルにこの汚い台所に綺麗でかつこよさにこだわる伊達組の貞ちゃんが来てい

たつて。

冷や汗が出る。

まさか。

あの夢。

全部。

本当だったってこと？

かなり混乱しながら、台所横の食器棚を見たが、三つあったグラタン皿は一つ失く
なつたままだ。赤いグラタン皿で下のコルク台がセットになつたものだった。だが、コ
ルク台はあるのに、赤いグラタン皿だけはない。どう見てもどこかで失くすような品物
ではないし、夢遊病発症で寝てる間に食べたとしたら、食べた後のグラタン皿あるはず
なのに、それもない。

これはどう見ても。

あの夢が本当だったってこと？

ああああ。

本物の太鼓鐘貞宗がこの洗っていない汚れた食器の積まれた台所に来たってことだ。最悪。汚い台所見られたああああ。

でも、うわ。ってことは本物に会っちゃったってことで!!!

何でもっと本丸の話とか伊達組の話とか話さなかったんだろう。

刀剣男士だよ？

実物だよ？

記念の握手とかサインとかもらっておけばよかった。

「つと。仕事に行かないとー!」

って、色々やってる間に出勤時間。

*

「疲れた」

玄関開けて、夕食も適当にカップ麺で済ませるとパソコン起動。

会社は事務系の仕事だが、自分が役立たずだとはわかってるが、それを指摘される
と凶星だけに落ち込む。色々と言われていることは正論だし、自分が仕事が遅いの

悪いのはわかっているし。失敗したわけではないけれど、すみませんを一日中言っていた。聞こえるように陰口をたたかれるのは、毎度のこと。慣れようとはしているけれど、慣れなくて心が中傷。聞いてるとわかって言ってる人は、私に辞めてほしいんだろう。ネガティブ発動してるなあ。

「はあああ。こういう時は、とうらぶだよね」

癒しだ。癒しに会いに行かないとやってられない。

玄関の扉を開けると靴を脱ぎ散らかしながらも自室へ駆け込みパソコン起動。

風呂に入ってきて、大急ぎで着替えてパソコン前に座るとやつぱりまだ黒画面。

最近、パソコンで刀剣乱舞をしていると、ぶっちぶっちネット回線が切れまくる。

スマホは持つていないので、パソコンで刀剣乱舞するしかないというのに。

今も起動したまま真っ黒画面だ。下の花丸が出てこないときは繋がらないことが多い。

前にこのまま放置していたら繋がるかもしれないと、その画面のままお風呂に入っただけ帰ってくると、そのまま真っ黒画面だった。つまり30分以上そのままだったこと。こうなると、何度もログインしなおすしか方法はない。

さて、これで10回目。クリックして起動。長い時で3時間。繋がった時は午前様。

それからのゲームの日課こなして終わり。だが、本丸のうちの子に会わないと1日が終わらない。

何度目かの真っ黒画面だ。

今日も長期戦になりそうだな。

そうと決まれば、コーヒーでも作ってくるか。

一旦。パソはそのまま放置で台所へ行く。

今日は全国的な夏日だった。もうすでに夜10時を回っていたが、自室から廊下につながる扉を開けるだけで湿気がたつぷり含まれたような熱の籠った空気が押し寄せる。

大急ぎで冷房の効いた自室の扉を閉めて台所へ向かう。

夜は電気をつけまくりながら歩くのはいつものこと。だって部屋の中真っ暗だから怖いんだもん。

台所を開け大急ぎで部屋の電気をつける。

白い光に目を瞬いた。

「おかしちようだい！」

え？

目の前に。

包丁藤四郎がいた。

驚きに声も出ない。目を何度つむつて開いても彼は消えていなくならなかった。自分の太ももをつねってみたがやっぱり痛い。これは夢ではないんだ。

どのくらい時間ぼかんとしていたかわからない。

その間、包丁くんはダイニングテーブルに置きっぱなしの袋に入った9個入りの一口バームクーヘンに目が釘付けだ。

「ねえねえ。お菓子頂戴。僕の主さん、甘いお菓子くれないの」

こちらを見上げて、ちらちらと私とお菓子と視線が行ったり来たり。どれだけお菓子が欲しいんだ。

これは、やっぱり夢じゃない。

あの時の貞ちゃんと同じで。

現実だ。

でも、この蒸し暑い台所で立ち話しては頭から溶けそうだ。

「ちよつと待っててね」

台所備え付けのクーラーを起動させ、冷房最強にした。

包丁くんは部屋に入るなりバタバタしている私にい彼はお菓子をくれないと思ったのか、しゅんと肩を落とし始めた。

「やっぱり、お菓子もらっちゃだめかな？」

「これが欲しいの？」

そういつつダイニングテーブルの上の一口バームクーヘンを差し出すと、ぱあっと笑顔に変わる。

どれだけ、お菓子好きなんだ。

そういえば、ゲームでお菓子増量を要求するとかいうセリフがあったつけ。

思いつつクスリと笑いながら一個と言わずと袋ごと彼に手渡した。

「はい。どうぞ」

その瞬間、包丁君の手に触れた。温度があつた。ぬくもりがあつて、短刀をいつも握つて戦つていたためか見た目子供なのに手は少し固い。

「立ち話は何だから、そこに座つてね」

「うん」

彼は素直にダイニングテーブルの椅子に座つてくれたので、私は右隣に座つた。冷房はまだ効いていないし、扇風機をまわしていたがかなり暑い。座つていてだけで汗が噴き出そうだけれど、包丁君は暑さよりも菓子が貰えたことが大きいみたいで、座つたまま、「これってどんな味だろう」ってニコニコしている。

「君は包丁藤四郎くん、だよね？」

「うん。そうだよ」

「君の主さん、甘いもの好きじゃないなら、私のお菓子持つて行つて包丁くんが叱られたりしないかな？」

お菓子が嫌い、だけならいいが、何かのアレルギーの類だと、そのお菓子を見るだけ

でも苦しい記憶を思い出して嫌だと思うのでそう聞いてみる。

「きつと、大丈夫だよ。主さん、甘いもの苦手なんだ」

「病気とかじゃない？」

「違うよ。食べれるけど買ってまで食べたくないんだって言うてたもん」

「他の刀劍様も甘いもの苦手なの？」

イメージとして大俱利伽羅さんがすごい甘いもの好きなんだけれども。

「あんまり好きな奴はいないよ。いち兄も好きじゃなくって、俺どうしてか聞いたら、いち兄は鍛刀で作られた刀なんだって。鍛刀で来た刀は主の影響を受けやすいから甘いもの好きではないのです。包丁はドロップできたから、その影響が少なく甘いものが好きなのですな、って買ってあげられずすまないって辛そうに言ってた」

いち兄の口調の真似は微妙に似ていて仲睦まじい様子が伺えて微笑ましい。きつと一期も彼に甘いものを買ってあげたかっただろうに、主を氣遣って買ってあげられなかったのだろう。

「そっか。じゃあ包丁くんの本丸ではお八つは甘いものでないの？」

「うん。主が好きなしよっぱおせんべいが多いよ。俺、羊羹とか食べてみたいんだ。けど主さんが嫌いだからって買ってもらえないんだ」

「自分で買って食べてるのもダメなの？」

「駄目じゃないけど。俺、初めての給料で万屋で甘いお菓子たくさん買って帰ったら、主人さんにばったり会っちゃってさあ。甘いものばかり食べてると夕食が入らない。だから、包丁はレベルがなかなか上がらないのよつ、って暫くお菓子禁止にしちやっただ。あれから、自分で買おうとすると兄弟がいい顔しないんだ」

しよんぼり言う彼。

ん？

レベルとお菓子は関係ないよね？

どっちかっていうと包丁藤四郎という刀剣男士はお菓子がモチベーションだ。食べられないほうがやる気が出なくなるよね。

そういえば、ボクサーでアイスを楽しみにしていて減量クリアして、自分ご褒美にアイスを食べようとしたところをコーチに止められ試合に負けたっていう話聞いたことがあったつけ。

それは困る。包丁君が心が折れて戦に負けるのだけは、私の心が折れる。

「じゃあ、包丁君がこれからも頑張れるように、これもこれもあげる」

買い置きのお菓子や、実家から送られてきた羊羹があつてよかった。小豆が絶妙にお

いしいから時々送ってもらおうのだ。

「わあ。すごいお菓子だあ。これって羊羹だよね？ いいの？」

「うん。いいよ。包丁くんに食べてもらいたいんだ」

たくさんのお菓子を紙袋に入れてあげる。

「ありがとう」

包丁くんから花びらが舞って驚いた。これが、あの、誉桜なんだ。

そんなに嬉しかったのか。

こちらもうれしくなつて微笑み返しつつ心の中でガッツポーズ。

あ、そういえば。

「それと、これとこれも」

昨日私を作ったお菓子を袋に詰める。

「これは？」

「クッキーとパウンドケーキ」

包んで包丁君の持っている紙袋へ入れる。食べたくなつて作っただけでも刀剣男士にお供えできるなら本望だ。

「それと、主さんに貰ったと報告してから、お菓子好きそうな人と皆で食べてね」

「え？ 主さんに聞くの？ いち兄じゃだめ？」

「うん。だめ。いち兄に言う

前に主さんに、ここに来たことも報告してね」

不審に思われたらどうしよう。

あ、そうだ。

「ちよつと待つてて」

こういう時は、もらつたということが重要なのだ。

ほら、お歳暮とか、そういうものつてありがたくもらうものだから。

迷子の包丁十四郎くんに、どうしても彼にお菓子をお供えしたく持つて行つてもらいました。

ご迷惑でなければ皆様でお召し上がりください。一般人の刀剣男士のファンより。

そう書いた紙を彼に渡す。

二次創作では刀剣男士が一般に知られている事もあつたし、そうでなくても刀剣男士の存在を知つてゐる一般人だと思ふだろう。更にファンだと書けば信じてもらえるだろうし、何より頂き物というのが重要。だつて、好意でもらつたものなんだから。それが主さんが包丁藤四郎くんにお供えされたものをゴミとして捨てることは好意を無にするということだ。それはさすがにお菓子の嫌いな主さんでも一般常識的にならないろう。

「これ、私からも主さん頼んだから主さんに渡してね」

「分かった。人妻には負けるけど。優しいんだね」

「ありがとう。人妻だったらもっとお菓子上手だと思おうよ」

「ホント?」

「うん」

だって、子供のためになんてもっと気合い入れそうだしね。

「だよね。いつか人妻のお菓子をもらえるように頑張るよっ!」

彼のモチベーションは人妻とお菓子だもんね。

包丁君はお菓子の袋を大事そうに抱えて嬉しそうに話してて。きつと、本丸ではお菓子の話とかできないんだろうな。仲のいい友達でお菓子パーティとかしたときに、これ当たりとかはずれとか、それだけで楽しかったりするの。包丁くんも主さんにそういう話できるようになれるといいなあ。主さん無理なら栗田口兄弟で。

あ、そうだ。あれもあつたつけ。

「包丁くん。ジュース飲む?」

「じゅーす?」

「甘い飲み物だよ」

「わあああ。ありがとう」

大急ぎでジュースを注ぐと、彼は美味しそうにそれを一口飲むと、目を輝かせて一気に飲み干した。タンつとコップが子気味のいい音を立てる。

「あま〜〜〜い」

「リンゴジュースだよ」

「こんなに甘い飲み物初めて」

「気に入って貰えてよかった」

それならお土産にいられてあげようと、テーブルのペットボトルに手を伸ばして彼の持っているビニール袋へ入れようとして。

消えた。

さつきまで包丁君が座っていた椅子にリンゴのペットボトルがゴトリと落ちて、さらに床に落ちて転がっていく。

帰ったの？

帰っちゃったの？

あまりに急で。

空虚になった空間を冷房と扇風機が回り続けて。

ようやく部屋の中が、ちょうどいい温度になってきてて。

しばらく、その場を動けなかった。まるで夢のようだった。けれど、目の前のジュースの入っていたコップが包丁君が目の前にいたことを告げている。

冷えたコップの汗のような水滴がつうつと下に流れ落ちていく。

「突然、帰っちゃったのか」

ちよつと、びっくりとがっかりとさみしさが入り混じる。

包丁くんは少年に見えても戦う神様なのだ。この世界を守るために、戦うためにまたあの世界に帰ったのだ。

そうだ。神棚なら包丁くんに繋がるかも。

貞ちゃんが来てから、彼らがもう一度来るようにと願って買った神棚があるのだ。設置するにしても目線の上にしなないといけなないと思うのだけれど、借家では釘を打つわけ

にいかないのので一緒に木製のラックも買って、一番上に神棚を置いたのだ。ベランダ近くの窓に設置してある。

床に転がっていたリングゴのペットボトルを、いつも水を注いである小さな神棚用のコップに注ぎお供えした。

「どこの本丸の包丁くんか分からないけれど。来てくれてありがとう」

部屋に帰ると、ぎぎぎつとパソコンから変な音が響いていた。

第3話

あれから。

何人も刀剣男士が来た。

顔を合わせて、お互い驚き顔のまますぐに消えてしまうこともあれば、少し話すこともあったり。

もしかして。

ここはこういう刀剣男士が集まる場所なのかもと、思い始めていた。

彼らはこの家に来て、数秒だったり長くて数時間で消える。

話ができた刀剣男士さんからの情報を集めると、ここに来た刀剣男士さんは全員別本丸の様だった。

それは、主さんの性別が違ったり人柄が違ったりしたからだ。

私は仮説を立ててみた。

二次創作とファンタジーを詰め込んだ設定だとして。

私も刀剣乱舞のゲームでは審神者なんだけれども。私の刀剣男士は一向に来たことがないし、主に会ったことがないという刀剣男士は今までいない。ということは、私のゲームの刀剣男士は存在していない。

けれど、別次元では現実には、歴史修正主義者と審神者の刀剣男士が戦っている世界が確実に別次元に存在する。

それで。

ここは刀剣乱舞の本丸（異空間に存在する）場所に繋がりにやすい場所ではないのだろうか。それは、このパソコンの音も関係してくるのかもしれない。偶然というにはおかしいくらい、このパソコンから変な音がすると、刀剣男士がこちらの私の家のどこかにいるのだ。

もしかして。

この世界が樹木だとしたら。その樹木には緑の葉が生い茂っているとす。そのすべてが別世界だ。その葉が何か風のようなもので揺れる度に隣の樹木の葉が重なる。その一瞬にこの家と別本丸が繋がるのではないだろうか。そのきつかけはきつとパソコンだと思う。これが電磁的な風になって世界樹の葉を揺らす。

チュウニ病的な考えなのは重々承知だ。

それで、風は偶然に起こるもの（パソコンの不具合）だから、いつ、とは言えないが確実に、刀剣乱舞の世界のどこかの本丸に偶然繋がって、たまたまその空間にいた刀剣男士がこっちに現れる。

そして、風が収まれば、刀剣男士も元の世界に戻され消えてしまう。元が別次元だけに重なること自体が奇跡みたいなものなのだ。

彼らは、突然私の家に現れ、そして消えてしまう。
そう思うとしつくりくる。

けれど、不思議に思うことが一つ。

彼らは突然別世界の私の家に来たというのに、いつも警戒しないのだ。まったくといっていいほどフレンドリーにまるで久しぶりに会ったような友達のように話しかけてくる。

見知った相手の家に来たように台所の冷蔵庫を開けて勝手にジュース飲んでいる髭切を見た時は驚いたし、燭台切光忠さんが来た時は料理本に興味津々で、譲って欲しいというのでもちろんどうぞとあげた。古い料理本なのにと思ったら主さんがこの本持っていたが色々あって本丸を引越す時に誤ってなくしたらしい。すぐ同じ本を探

したが絶版になつて。ずっと古本屋を探していたらしい。

短刀達は、来てすぐ普通にお菓子やご飯を食べることもある。

作っている間にいなくなつたこともあつた。それは、かなりがっかりだつた。

沢山食べてもらおうと多めの唐揚げだつたから、神棚にお供えしてから三日かけて食べた。胃もたれ半端なかつたのはいい思い出。

そんな感じで。どういう訳か刀劍男士は見知らぬ私を警戒しない。

それが不思議で。

一度、訊ねた事が有る。

蛭ちゃんが来た時だ。

「蛭ちゃん。私をどうして信頼してご飯とか食べてくれるの?」

夕食時に来た彼と一緒にご飯を食べていた時だ。

「気づいていないの?」

「はい?」

「ここは龍脈が集まる場所なんだ。鬼も入つてこれない場所。人間なら、清らか過ぎて辛い場所。そこに住む人間。それだけで、僕らから見れば信じるに足る人間なんだ」

「龍脈?」

何かを見つめながら蛭ちゃんが話してくれる。

「龍脈っていうのは、自然の気の流れのことだよ。自然は陽の気と陰の気があって、ここは陽の気が流れて集まる場所なんだ。かなり昔には神社があったと思う」

「私、神様の住んでた場所に住んでるの？　なんて、なんておこがましい」

ただの人間が。神様の家があったところに住んでるんだよ？

身分不相応だ。

「大丈夫。あなたは歓迎されてるよ。この土地に歓迎されるってことはね、この神様に歓迎されてるってことなんだ。だから、俺たちも直ぐにあなたに親戚みたいに思えるんだよ」

「そんな場所だったんだ」

「うん。それで、この神社、かなりの信仰を集めた場所だったらしい。けど、ここの神様、もういないんだ」

「いない？　どこにいったの？」

「わからない。けれど、ここは神域と同位の清らかな場所のまま。そこに住み続けるあなたは信に足る。あなたはとつても美しい魂ってことなんだ」

うつくしい魂？　私が？

「ありがとう」

「それに、同種の刀は二度とこないよ」

「どうして？」

「この龍脈の力の波長が一振りずつに影響しているみたい。だから、俺、蛭丸は俺だけだし、前来た刀も二度目に来たものはないんじゃないかな？」

「今まで来た刀は一振りだけ。ダブリはない。」

「その通りだよ。もしかして、元の本体が一振りだから、一振りしかこつちに来ないってことかな？」

「そうだよ」

「そうだったのか。」

「今までも、同じ刀剣男士が来たことはないけれど。」

「前に来た刀剣男士は二度とこちらには来ないんだ。」

「それなら。」

「この蛭ちゃんに会うのは最初で最後になるんだ。」

「蛭ちゃん。色々教えてもらってありがとう」

「こつちこそ。今日はいろいろ聞いてもらってありがとう」

蛭ちゃんがはにかみながら笑う。

彼の主はいい人なんだけれども。明石とちよつと合わないらしい。真面目な審神者さんだけに明石が不真面目に見えて許せないらしい。

「明石はやる気なさそうに見えて、やるときはやる刀剣男士なのにね。そこわかってもらえるといいね」

「あなたはよく明石のこと知ってるんだね」

「知ってるうちに入るのかわからないけれど。彼が本気になるときはかなりやばいと思つたほうがいいと思つてる。やる気ないと言つてるときが通常運転だけど。それでも、いつも仕事はきっちりしてくれるし。それで、しっかり審神者を守ってくれる。それが、明石だと思つてるんだ。蛭ちゃんと国俊が保護者だつて言われるけど、明石は実は責任感強いしわざという時は頼りになるしいい刀剣男士だと思う」

最近読んだ二次創作の明石が本当に男前だったせいでそのイメージが強いのだ。

「ありがとう」

蛭ちゃんも保護者を手放して褒められて嬉しそだった。

「そうだ。蛭ちゃんにお土産、これどうぞ。明石と国俊と一緒に食べてね。すっごい美味いんだよ」

これは今日帰り道の駅前で買ったやつだから霊力とかは入っていないだろう。

彼に、名物の御座候（大判焼き）を渡してすぐに彼が私を見上げて、
「あ……」

ありがとうと言ったんだと思う。目の前には蛍ちゃんはいなかった。

「主さんと明石、仲直りできるといいね。蛍ちゃん」

いなくなった空間に自分の声だけが響いた。

*

蛍ちゃんが来てから、そろそろ刀剣男士が来るかもしれないなど心待ちにすること数週間。

久々にパソコンからぎぎぎぎ、変な音がする。

もしかして。

今日は。

きつと。

会える。

何もの刀剣男士がたまに訪れる家。

予感がして。

熱帯夜にスリッパを履きつつ台所へ行き電気をつけた。

「ひっ!!」

驚きに口元に手を宛てて悲鳴を飲み込んだ。

そこにいたのは。

血に染まった鶴丸国永だった。

第4話

「よっ。突然こんなのが来て驚いたか！」

真顔のまま頭から血をたらたらと流しながら、左腕が肘あたりからなくなっていて、真つ赤な肉を割った傷口から骨が白く見えて。

台所の床に血だまりができて。

パニツクになった。

「あああああ

!!!!!!!

涙が噴ききりで、何を言ったのか分からない。

泣きながら、近くにあつたタオルで傷口を押さえた。

そうだ。確か、どつかに包帯があつたはず。

大急ぎで、台所を出て自室に入るとバタバタと包帯を探し、急いで台所に帰り、値札

の貼つてある包帯を出して顔をぐるぐる巻きにした。

「ちよ、きみな此を」

「血が、血がつ!!! あああああ!!!」

「きみ。ちよつと、血は止まったぞ!!! もう、だいじよ」

「だ、つて、けが、まだ、あつち、あつち、あつち!!! イタイっ!!!」

痛いよおおおっ!!! 血が!!!

「痛いのは俺だと思うんだが」

「やっぱり痛いんだよねっ。いたいよねえええええ」

あちこち体や足も切れて。どうしてこんな怪我で話せるのだろ。人間なら痛くて動けない。声だつて出せないくらいの怪我だ。

「きみ。大丈夫だつて。ここは神域に近いから。もう、痛みはないから。俺は刀劍男士だ。手入れでしか治らない」

「そうだけどつ!!! そうだけどつ!!!」

「実は主が、俺達刀劍男士の手入れをしてくれなくて、久しくてな。蔵の中に資材は山のようにあるつてのに。鍛刀に使うから手入れには使わないというんだ。俺たちは皆戦場でいろいろとケガも増えて、折れる奴らもいた。もう数振りしか残つてなくてな。動けるのが俺ぐらいで、もう我慢ならんと、光坊の手を振り切つて主に直談判に行こうとして、廊下を歩いていたらここに来た。驚いたなあ。こんな神域があるとはなあ」

タオルと包帯で頭と左腕をぐるぐる巻きにされた鶴丸国永が腕を組みながら流ちように話す。左腕に巻いたタオルはすでに真っ赤に染まっている。

「あ、るじ、手入れ、してくれない？」

「そうだ」

動揺しつつも彼を見上げた。

一つ一つ言葉をつなぐ。

あるじが。

手入れを。

してくれない。

主が手入れをしてくれない？

それって。

資材があるのに手入れしない。

それは、ブラック本丸だ。

今まで来た刀剣男士はホワイト本丸の刀剣ばかりだった。

だから、ブラック本丸の刀剣がいるなんて。現実の存在するなんて。

そんな。

人間のために戦ってくれている神様に。

なんてひどい事を。

大急ぎで正坐して土下座した。

「すみません。ごめんなさい。にんげんが、ごべんなつ、さい」

泣きながら伝えた。鶴丸国永の血だまりが私のパジャマを赤く染める。

それだけで、涙が止まらない。こんな怪我のまま刀剣男士を放置している主が、同じ人間なんて。

「人間が、ごめんなさい。ごめんんつつさき、」

「君が謝ることではないさ」

頭上から戸惑った声が降る。

そのまま、やんわりと肩を掴まれ顔を上げるように促される。

彼の瞳は、私を恨んだり人間だと蔑んだり憎んだりしていない瞳で。

いつも私の家に訪れるホワイト本丸の刀剣男士のものだ。

「だつてっ！ 主が手入れしないってっ！」

「君が悪いわけではないだろう」

「それでもっ！ 人間がっ！ こんなことをっ!!」

感極まつてずびずび泣きながら、ふと、時間がないのを思い出した。

ここにいるのは数秒だったり、数時間だったり。今まで彼をタオルと包帯でぐるぐる巻きしてたんだ。もう全然、話している時間があまりないだろう。

「こんのすけは？ 通報がダメなの？」

「こんのすけ？」

「そう。主には目のふちに赤い隈取のあるキツネがサポートにいるはずだけど。そのキツネがこんのすけで政府に主がそんな違法なことをしていると通報するんだけど。見たことない？」

「ないな」

「じゃあ、きつと封印されてるかも。そうなる主の部屋かな。壊せばそのまま通報されるし」

「きみ、何でそんなことを知って？」

「担当官は主とつるんでる感じ？」

彼の言葉を遮り矢継ぎ早に質問を投げる。彼は不可思議に小首をかしげながらもそれに答えてくれた。

「そうだな。俺達が傷だらけでいても素知らぬ振りさ」

「それから。それから。えっと」

手持ちのお菓子やら食べ物を袋に詰めたものを彼に渡す。

「甘味は疲れた時にいいから」

いつも誰が来てもいいように用意しておいてよかった。

「それから、一つお願いです」

「なんだ？」

「主を殺さないで」

彼の目が一気に険しくなる。きっと、彼は今まさに主を殺しに行くところだったのかもしれない。

「それは。約束できないな」

彼は眉を寄せほの暗い炎を湛えた瞳に変わる。

それはそうだろう。

家族にこんな仕打ちをされたら、私だつて殺したいと思うだろう。思うだけでなく行動に移すかもしれない。それを、出会ったばかりの他人が殺すなど言ったら、何も知らないくせにと、怒り出すだろう。それでも。

「人間のせいで堕ちないで欲しい。神様。お願いします。あなたの為に。主を殺さないで。鶴丸国永様。堕ちないで」

彼の目が見開かれる。

その強い視線を真っ向から受け止めつつ、堕ちないで欲しいと願いを込めて見つめた。

彼は少し戸惑ったような瞳に変わった。

彼にとつては死活問題だというのに。

主を生かしておいても鶴丸が折れてしまつてはしようもないのに。

それでも、人間にこんな仕打ちをされているというのに、同じ人間の私に対しては、それは別だと言ひ切つてくれた。人間全部が嫌いになつてもおかしくないことをされているのに。彼はそれでも人間を許した。こんなに綺麗な心の神様が、人間のせいで真つ黒な化け物のような祟り神になつてほしくなかつた。堕ちないで欲しかつた。

「出過ぎたことを言つてすみません。それと、通報の仕方はこれに書いてあつて」

もしかして、ブラック本丸の子が来たら通報の仕方をまとめた紙を渡そうと用意しておいてよかつた。

彼に手渡して、一つ一つ説明する。

二次創作の知識なので通じるか分からないけど。

「手伝えればいいんだけど。私は別次元の存在なので」

「どういふことだい？」

「ここは、鶴丸国永が刀剣男士として存在してはいない世界です。ここは別次元です。蛭ちゃんに聞いたから本当」

「だったら、この神域は？ どういふことだい？」

「龍脈の集まる場所でかなり昔は神様が祀られていた場所で、浄化された神域なんだって。蛭ちゃんと言ってた。だから神様が、刀剣男士が好む場所で、集まりやすいんだって」
「じゃあ、君は何で俺達を知っていたんだ？」

「将棋みたいに歴史修正者を倒す遊戯があるの。その物語もあって。ブラック本丸っていうのもあって、その中に主が非道で、刀剣男士が無理な進軍に伽を命令したり、手入れをせずに放置や同土打ちをさせる本丸がブラック本丸と呼ばれるんです。あなたの本丸がブラック本丸なら、こちらの知識が当てはまるのなら、こつちで考えた通報の仕方を通じるかもしれないとまとめたものがここに書いてある。こつちの世界で考えたことだから通じるかどうかわからないけれど」

「しないよりはましだな」

「はい。上手くいくといいんだけど」

皆が助かりますように。今の苦しみが終わらせることが出来たらいいんだけど。

いろんな思いが渦巻く中、彼の金色の目がこちらを見つめている。真顔は怖いんですけど。

「そうだ。もしこの地獄を終わらせることができたなら、君に礼をしよう」

頑張って笑おうとしているようだけど目が真顔のまま口の端を釣り上げた状態だ。もしかして、顕現されてから笑ったことがなかったのかもしれない。

「礼、ですか？」

「ああ。そうだ。君の願いを一つ叶えよう」

「それはきつと、無理だと思う」

「なぜだい？」

「ここに二度、訪れた刀剣男士はいない。同じ刀種もない。だから、鶴丸も、きつとこれが初めてで最後。一期一会。私に出会ってくれてありがとう」

ニツコリ笑顔で彼を見つめた。

彼は驚いた顔のまま、何かを言いかけて。

「き…」

目の前から消えた。

台所の床に、大きな血だまりを残したまま。

彼は、いつも訪れる刀剣男士と同じように跡形もなく消えてしまった。

第5話

数カ月経った。

あれからも何人もの刀劍男士が来たし、その誰もが別の本丸で用意していたお菓子を持って帰る人もいれば、お皿やら湯のみを持ち帰る人もいた。なんだか雅さんが気に入ったものは、私が子供の頃に作った工作物（湯飲み）だったんだけど。雅とは？ と
なつたのは内緒だ。

そんな中いつも思い出すのは、あの、血まみれで現れた鶴丸国永だ。

彼はどうなつただろうか。

主は捕まつただろうか。

無事に本丸の皆は手入れされたらろうか。

誰も落ちていないだらうか。

鶴丸さんは折れてないだろうか。

鶴丸の国も審神者名も聞かなかったのが今になって後悔の嵐だ。

それさえ分かっていたら、ここに時々来る刀剣男士に通報を頼むという選択肢もあったのに。なんであの時、彼の国名や主の審神者名を聞かなかったんだろう。自分のバカバカ。

「はあ」

何度目かのため息を零して家を出た。

最近、パソコンから変な音がしない。

夏のころは始終パソコンがネットに繋がらなくなって刀剣乱舞ができなかった時に刀剣男士が来たのに。

冬になって電波の調子がいいのか、最近ネットもゲームもさくさく動いて繋がりが良い。お陰で刀剣男士が来ない。

ふと、ここに来た刀剣様を思い出していると来ていない刀剣男士は後数振りになっていることに気づいた。最近、パソコンの調子はいいみたいだし。もう、二度と刀剣男士

には会えないのかもしれないな。

*

「ハハハはどっだろうか？」

玄関開けたら、青い髪色の青い瞳。袖なしに近い戦闘服の千代金丸さんが居ました。

呆けた顔で彼を見上げた。

だって、もう私の家には刀剣男士は誰も来ないと思つていたから。

びっくりだ。

久々の刀剣男士登場に慌てながら、とっても寒い玄関から台所へ案内する。

今は冬だ。あれから半年が経過し、冬の日本で千代金丸さんの袖なしの夏の衣装は寒すぎる。台所は唯一ガスストーブが付く場所なので、一番早く温まる場所なのだ。

台所の扉を開けてガスストーブの前に案内し点火した。

「これ、ストーブ、暖かくなる機械なんです。ここに座つて当たつててくださいね」

そう言うのと引き寄せられるように彼はしゃがんで両手を伸ばし、点火したばかりの勢い良く吹き出る暖かい風に手をかざしている。

「千代金丸さん。ずっと、玄関にいたんですか？」

「あそこは玄関さ？」

「はい」

「そうだな。あそこで暫く明かりを探していたんだが出口がなくて困っていたさ」

彼は私の家に来て、もうすでにだいぶ時間が立っているようだった。彼がかなり寒がっているところを見ると、30分ぐらいは既に経過している。

「寒かったでしょう」

手袋とマフラーをハンガーにかけてコートを脱ぎながら彼を見つめるとすごい寒かったのか肩をさすりながらストープに当たっている。千代金丸さんは沖繩の刀剣男士さまだ。冬の寒さは苦手だろうな。

そつと、今つけていたマフラーを首に回してあげる。

「これは、あたたかいなあ」

「はい。マフラーです」

「そうか。これがまふらーか」

そういう感じのを巻いている刀剣もいるけれど、自分では巻いたことはないんだろう。マフラーが言いなれないようで幼さを感じてしまう。

「気に入っていただけなのなら差し上げます」

「じゃあありがたく貰っておくさ」

肩を震わせマフラーをぎゅつと握りしめているので、よっぼど寒いみたいだ。「ちよつと待っててくださいいね」

大急ぎで毛布を出し背中に掛ける。

台所で毛布にくるまるのあんまり行儀がよくないのでしなのだけれど。今日は無礼講だろう。

「これは？」

「毛布です。しばらくこれにくるまっててくださいいね」

ぎゅうつと紫色の毛布をくるくるに体に巻き付けている。

よっぼど寒かったんだなあ。

あつたかいお茶でも出そうとポットに水を入れてみると背中越しに声がかかる。

「あつたかいなあ。もしかして、ここは、鶴丸が言っていた場所かあ？」

「鶴丸って、もしかして手入れされずに進軍させられていた左腕が無くなって血に染まった鶴丸国永さんですか？」

大急ぎで彼の瞳を覗き込むように見つめた。彼は、のんびりとした調子で笑顔を浮かべている。

「そうさ。彼は、家の主に引き取られたんだ」

「そこ詳しく教えて貰えませんか？」

「ああ」

毛布にくるまったまま、手を出すのも寒いのか指先だけ出していて、まるで芋虫のようになっている。彼にダイニングテーブルの椅子に座ってもらい、あつたかい緑茶といつ刀剣男士が来てもいいように用意していたお菓子（栗饅頭）を出しつつ、

「鶴丸さんは？ 怪我は治ってますか」

テーブルにそれらを置きながら、大急ぎで鶴丸のことを聞いた。

「何故そう急ぐのかよくわからんなあ」

「ここにいられる時間はごく僅かだからですっ!!」

向かい合わせに座ると、彼を継るように見つめた。

「そうなのか？」

のんびりとした答えについて焦れてしまう。彼のそういうところが実は大好きなんだけれど、今回ばかりはタイムリミットと都の戦いなのだ。今この瞬間目の前から消えたら立ち直れない。

「あのっ！ 鶴丸さんは？」

「元気さ」

その言葉で脱力。

よかった。元気なんだ。

はああああつと深いため息をこぼすと、千代金丸は嬉しそうに目を細めて私を見つめている。

「鶴丸に頼まれたことを聞いて貰ってもいいだろうか？」

「もちろんですっ!!」

鶴丸国永は千代金丸の数日後に彼の本丸に來た刀劍勇士だった。

鶴丸に聞いた話では、彼の下本丸では鶴丸国永の本丸はブラツク本丸で手入れをせず、に無理な進軍ばかりをしていたらしい。それはもう、短刀は使い捨ての道具とされ、レアは売り飛ばす本丸だった。それでも鶴丸は仲間を守りながら生きて、生き残っていた。だが、限界はある。とうとう鶴丸は我慢ならんと主を切りに部屋を飛び出した。

主の部屋に行く途中、廊下を歩いていたはずなのに突然別の場所に居た。そこは、淨化された自然の陽の気が集まった神域に近い場所。そこで鶴丸は人間の女に会った。彼女は鶴丸の姿を見るなり驚いて泣きながら傷を白い布で止血し「人間がごめんなさい」と泣いて謝り土下座したそうだ。それから、主を殺すな、と。どうしてだと、はじめは思ったが、彼女は、鶴丸が人間のために堕ちて欲しくない、と言ったそうだ。

それで、鶴丸は思いとどまった。彼女の別れ際に通報の仕方や色々な方法を伝授され、おかげで鶴丸の主は捕まった。

「ああ。最近、少しだけ笑うようになったさ」

「よかったあああああ」

涙が噴き出る。

「どうした？ どこか痛むのか？」

「痛くないです」

「そうか。それならいいさ」

千代金丸は顕現されて間もないのだろう。人間が泣くというのは痛みからだと思っているらしい。痛くないといったのに泣き顔の私を心配そうに見つめているので、大丈夫アピールで笑顔で涙を^ごし^ごしとティッシュで拭きつつ。

「鶴丸さんが元気だと分かってホッとしたんですよ。ずっと心配だったからから」

彼は笑顔になった私にほっとしたように笑いかけた。

「やっぱりあんたは鶴丸に聞いた通りの人さ」

「え」

「俺と鶴丸は同室さ。よく話しをしたんだ。いつもあんたの話さ」

「私の?」

「そうさ。鶴丸はあんたに会いたがつていたさ。でも、別れ際に願いをかなえると
と無理だと返され、ここに来る刀劍男士は一期一会。二度と会うことはないと言われ
たと悲しんでたいたさ」

「そうだったんだ。」

「それで、だ。この本丸に来て、一番新参者である俺に話があると、鶴丸が俺にこの話を
したのさ。もしも、あんたの所に行くことができるとしたら、新刀劍男士の俺だと思っ
たから、俺に頼むと頭を下げた。出会って直ぐだったからビックリしたさ」

鶴丸国永という刀劍男士のイメージは早々初対面の刀劍男士に頭を下げるなんてイ
メージがない。それなのに、彼は私に伝言を頼むために初対面の刀劍男士に頭を下げ
たのか。

「それで、千代金丸さんは私のことを知っていたんですね」

「そうさ。それでさ。俺は鶴丸にあんたに会えたら伝えてくれと頼まれたことがあるん
だ」

「何ででしょうか?」

彼は私と向き合うと毛布の中にあつた手を私に向かって差し出した。

「手?」

「うん。握つてくれるか? そう鶴丸に言われているさ」

「はあ」

彼は大きな手だった。刀を握っているだけあつてごつごつとした分厚い男の人の手。彼の手を握り返し、握手状態。

「じゃあ、鶴丸の伝言を伝えるさ」

「はい」

彼は私の目を見つめてにっこりと笑いかけた。

「君のお陰で仲間を救うことができた。ありがとう。願いを叶える約束は今も健在だぜ。願いを千代金丸に言ってくれ。そうすれば、俺が君の願いを叶えよう」

一気に彼が告げると、

「だそうだ」

と青い瞳が笑う。

「俺も鶴丸の願いを叶えてあげたいさ」

「仲がいいんですね」

「俺は同派がいらないからなあ。鶴丸も同じさ」

「え？」

みつちゃんとか貞ちゃんとか伽羅ちゃんがいると思うんだけども。

「よくはわからんが。鶴丸は長船とは打ち解けないみたいさ」

引き取られてもいろいろあるんだな。大丈夫かな鶴丸さん。

「そうですか。願い、なら前から決まっていたさ」

「鶴丸は、何をいつても叶えると言っていたさ」

「じゃあ、いいいます」

「うん」

「鶴丸国永さんが幸せになりますように」

青い瞳が見開かれ、握っていた手に力がこもるので、こちらも握り返すように力を込めた。

「それが、あんたの願ひさ？」

「そうです。私の願ひは、鶴丸国永さんもそうですけど、私のところに来てくれて出会った刀劍男士が全員、幸せになることです。おこがましいかもしれないけど。でも。そう思っています。だから、千代金丸さんも幸せになつて欲しいです」

なんか、神様相手に偉そうな口きいてしまつたけれど。後悔はない。

千代金丸さんのめが見開かれて、次の瞬間、誉桜が舞い散る。瞬きながら彼を見つめると溶けそうな顔で微笑んでいる。

「あんたは鶴丸が言った通りの人だな」

「え？」

「女神だつていつていたさ」

神様に女神つて言つてもらえるとは。

「俺も今そう思つたさ。鶴丸が俺に伝言を頼んでもらえてよかつた。あんたに出会えて良かつたさ」

「ありがとうございます」

はにかんだような笑顔にこちらも気恥ずかしくなる。思わず俯いてしまう。もうそろそろ時間がないかもしれない。

彼が冷え切るぐらいにこの玄関にいたのなら、今日の前で消えてもおかしくないだろう。

もう、これで刀剣男士に会うのは最後なのかもしれないな。

うつむいてる場合じゃない。今この瞬間の出来事を、見逃さないようにしないと。もう二度目はないのだから。

顔を上げて彼を忘れないように、じっと見つめる。

髪飾りが黄金色。千代金丸の刀は博物館のをウェブで見ただけけれど、実物はもっと綺麗だった。

余すことなく目に焼き付けるように彼を見つめる。

彼の青い目が見透かすように見つめ、私を包み込むように握る手に力が籠められる。

「御神刀が言っていたさ。あんたをこちらに連れてきても歪みは生じない。寧ろあんた

を求める刀劍勇士の念が強すぎて、今のままの方が歪む。その事の方が、歪むという点では大きいさ」

何を言いたいのかわからないけれども。

「?」

「あんたは、刀に寄り添う。審神者の力がないただの人間だが、刀劍勇士に寄り添うことができる存在さ。そういった存在が政府にはいなかったさ。やっぱり、あんたは女神さ」

女神なんて。おこがましい。

そう思った。

けれど、神様の意思を否定するのははばかられて。無言のままアンニユイな笑顔のまま彼を見つめた。

千代金丸は、少年のようなはにかんだ笑顔で、それはまるで真夏の太陽の白波を煌めかせるような笑顔で。

出会えて嬉しいとウエルカムオーラの笑顔だったので、私もうれしくて微笑んだ。

この笑顔を覚えていよう。ずっと。

彼はその間、手を握ったままだった。

そろそろ手を放さないと、彼が消えるだろう。このまま手を放さないままでもいいけれど。すつといなくなった手の感触はかなりさみしいものがある。燭台切さんの時がそうだったつけ。料理本を渡すときに片方の手が私の手にかぶって握りしめられて、あつと思つて彼を見上げた瞬間にいなくなつてた。あつたかい手のぬくもりを残したまま。あの時暫く燭台切さんの大きな手の感触が残つてたつけ。

あ。でも。その方がいいかも。

最後に来た刀剣男士の千代金丸さんの手をずっと覚えていたい。

そう思つて、ぎゅつと手を握り締める。

「私に出会つてくれて……」ありがとう。

言い掛けて世界が歪んだ。

「なんくるないさ」

彼の言葉が耳元で聞こえた。

いつの間にか抱きすくめられていて。男の人の腕の中にいるというのに、はずかしいとか、どうしようとか、慌てるような気持ちが浮かんでこなくて。

その代わりに安堵の気持ちが押し寄せる。

どうしてこんなに、安心するのか分からない。

色々な刀剣男士に出会って話たけれど、千代金丸さんはその中で特別、話をしている緊張するでもなく、まるで家族のようにはなせるような、ほんわかした感じの刀剣男士だった。

そのせいだろうか。

まるで、お父さんに抱きしめられているような気がするの。

彼は毎日忙しい私を繋ぎとめようとしているようで。

仕事は順調とはいいがたくて。人間関係で精神擦り切れて。仕事量も半端なくてパ

ワハラで。だからこんな遅い時間に帰ってきたんだけど。

心が折れそうなときに抱きすくめられると、それだけで安堵して。

神様を抱きしめ返した。

なんだか子供みたいだな。自分。

でも、千代金丸さんは、もう元の世界に帰ってしまう。

ああ

かみさま

この出会いをありがとうございます

安堵の青い青い波が心の中を押し寄せて、彼の髪や瞳と同じ青い色が心の中を染め上げて。

一瞬。

一面の青色の海原が見えた気がした。

もう一度彼の声が頭に響く。

なんくるないさ

第6話

「なんくるないさ、だ」

気が付くと私は、千代金丸さんの腕の中。辺りを見回すとゲームで見たことがあるような障子。その奥には池。雨が降っているのが見えた。

「ここは?」

「俺のいる本丸さ??」

「え??? ええええ???」

ちよつと待つて?!

私は、別次元にいたのに。

「どうして? 私、ここにいるの?」

「それは、君の願いを叶えたからさ」

「はい?」

「君は、鶴丸の幸せと俺の幸せ、出会った刀剣男士の幸せを願ったさ。鶴丸の幸せは君が鶴丸の傍で一緒に暮らすことさ」

ぐらぐらと頭の中でその意味が回る。

まさかの自分の願ひ事のせいでこちらの世界に来ることになるとは。

まだ気持ちしが現状に追いつきそうにない。

千代金丸さんの腕の中にいる自分というのも信じられない。

急に吐き気がこみ上げる。

なんか、なんだか。

何かが、押し寄せてくるような感じが、する。目に見えるものではなくて、気配という波動というか、そんな感じの、灰色な悪意ではないんだけれども、それに近いもの。めまいが半端なくて。まるで目の中に白いライトを浴びているようなこじ開けられているような。語彙が追いつかないが。とにかく無理やりなにかが自分の中に入ってくる。

「なんか、きもち、わるい」

こみ上げるものを何度か堪える。

ここで吐くわけにはいかない。

ここはどう見ても千代金丸さんの部屋だろう。それも、千代金丸さんと鶴丸は同室だと言つていたつげ。

つと、また胃液がこみ上げる。夕飯は食べてなかつたから、吐いても固形物はないと思ふけれども。それでも、他人の家で彼らの部屋で吐くなんて。とんでもない。

途端に青い髪の色が目の前に広がり、姫抱きのまま廁へ連れていかれた。

「大丈夫さ？」

千代金丸の励ます声が聞こえた気がしたが、私はそれどころじゃなかつた。

トイレに連れていかれるとすぐに個室鍵をかけて吐きまくつた。

何度となく胃の中を何かがぐるぐるとして苦しい。

「きみ、大丈夫か？」

鶴丸の声だ。彼もこのトイレの扉の向こう側にいるのか。

ブラック本丸は摘発され、元氣だと聞いてはいたが。

その姿をちゃんと肉眼で見えたかつたが。

「うっ」

吐き気が半端なくてそれどころじゃない。

こみ上げるものと戦っていると、トイレの外でいろんな声がある。

「主。男の廁に入るのはどうかと」

「それどころじゃないでしょ。ここに人間の女性を連れてきたってどういうことなの？」

千代金丸っ！」

「鶴丸の恩人を連れてきたさ」

「だから、どういうことって聞いているのっ！」

「主。客人が苦しんでるんだ。俺っちが診てるから二人を連れて執務室で待ってっちゃくれねえか？」

「薬研は突然来た不法侵入の肩を持つのね」

「そうじゃねえ」

「ちよつと待ってくれねえか？俺が千代金丸に頼んで願いを叶えてもらったんだ」

「俺も彼女がこちらに来てほしいと願ったさ」

「なんですつてっ!!」

きいきいとヒステリー気味の声が響く。

「主、俺は……」

「黙りなさい。鶴丸国永」

ぴたりと声がやむ。

「薬研藤四郎。不法侵入者は貴方が執務室に連れてきなさい」
「わかった」

「鶴丸国永と千代金丸は私について来なさい」

二人の返事がない。

「千代金丸、鶴丸国永、返事をしなさいっ!!」

また主と呼ばれた女性の声がキンキンと廊下に響く。

「ああ。わかったさ」

その声に呼応するように千代金丸の声が聞こえた。

苦く絞り出すような、否と言いたいのには言えないような、そんな声。

「っ」

鶴丸は返事もしたくないのか、息づかいが漏れ聞こえる。

「鶴丸、返事をしなさい」

主の命令にしぶしぶといった感じで。

「わかった」

と、絞り出すような声が聞こえた。

彼らの声が遠ざかっていく。

しばらく込み上げてくる物と戦っていると薬研の声がする。

「大丈夫か？」

「は……」

答えようとしてまた胃の中がこみ上げる。

吐く声とか音とかもあんまり聞かれたくないんだけど。ここが男性トイレというのもちよつとかなり恥ずかしいんだけども。

もう、仕方ないと腹をくくって、胃の中のもの全部吐き出した。

数分は立っただろうか。

ようやく、胃の中が収まってきた。

「口をゆすぐように水を持ってきた。鍵を開けちゃあくれねえか？」

薬研の声がそう告げる。

彼も半端なく、私を警戒しないみたいだ。突然現れた人間だというのに。

「大丈夫か？」

「はい」

「これで口をゆすぐといい」

グラスに入った水を手渡されて、口をゆすぐとトイレに吐き出す。

吐くところは見せたくないんだけれども。

彼は気にしていないようだった。

「治まったみてえだな。今から主に会ってもらってもいいか？」

「はい」

「主も、蚊がいたから退治しなさいとか、刀剣同士の喧嘩は認めない、全員仲良くしなさい、とかそんなことまで絶えず言霊を使うってのはどうかと思うんだが」

「もしかしてさっきのも？」

「ああ」

あれは、言霊だったんだ。だから、薬研も鶴丸も千代金丸も渋々といった返事だったのだ。

「刀剣男士同士のけんかは認めない。全員仲良くしなさいってのも言霊を使うんで、歴史的に対立していた党派とかは困ってる。兄弟仲良くってのも蜂須賀の旦那は辛そうだったな」

「兄弟仲良くって……」

蜂須賀には酷な話だろう。

それなのに、仲良くしなさいと言霊で言われては、できることとできないことがあるだろう。蜂須賀兄弟なんか特にそうだろう。

私の家に蜂須賀兄弟も来たことがあった。ハッチは長曾祢さんは、いろいろと理由づけていたけれども。言いたいことは長曾祢虎徹を贋作だが刀劍男士としての力は認めていると、兄としても、と小声で言っていた。それに、刀劍同士で仲が悪い刀劍はいるし、それはむっちゃんやんと新選組とか、歴史上どうしようもないこともある。

それは、表面上仲良くはできるかもしれないけど。命令でなんて。

それも、人間が神様に命令するのか。

「人間ごときが」

ふと思ったことが音になって。しまった。他の本丸の主に対してひどいことを言うてしまった。

「ごめんなさい。初対面なのに主さんにひどいことを言ってしまった。すみませんでしたっ!!」

大ぶりに頭を下げる。そのままの姿勢でいると、薬研の音が頭の上から響く。

「顔を上げてくれ」

そろりと恐る恐る顔を上げつつ、怒りの視線で射抜かれるのだと身構えた。

震えつつ、えいやつと顔を上げて彼の顔をみつめると。

「あんだ。いい嬢ちゃんだなあ」

藤色の瞳が嬉しそうに微笑んでいた。

葉研に主のいる執務室に案内された。

廊下を歩いてきたのだが、曇り空からは雨ばっかりだ。これって、梅雨仕様だろうか。雨音は嫌いじゃないけれど。ザーツと音がするぐらいの豪雨だ。台風ですかと現代なから問うぐらいの雨粒がこれでもかと思われ降り注いでいて。梅雨のような湿気のこもった蒸し暑さ。それだけで、廊下歩いても梅雨独特の湿度が高く、熱帯雨林並みの熱気と湿気がすごい。濡れた木の香には少しカビの香りも混じっている気がする。

「主。連れてきたぜ」

「ここに通しなさい」

「ああ」

薬研が障子を開けると、想像通りの執務室だ。パソコンや機器。水晶玉もある。

主さんは鮮やかな桃色に桃の花の透かしの入ったの訪問着を着た女性で30代後半に見えた。

隣に座っているのは初期刀だろうか。雅先輩がいた。

だが、この部屋に鶴丸と千代金丸はいない。

「今、政府役人を呼んだの。もう来ると思うわ」

主さんは薬研に話しかけるが、主さんは会っ私のほうを一度も見ようとしな

でも、あいさつは大事だ。見ようとしていないだけではないことはわかっているんだし。本丸に入ってきた不審人物だということは変わりないし。突然だったし、彼女も警戒しているんだろう。

「あの。はじめまして、主さ..」

「黙りなさいっ！ 誰が発言を許可するといいましたっ！」

主さんは私の顔を親の仇みたいに睨みつけ、ヒステリックなキンキン声を上げた。

その声に周りの歌仙と薬研の姿勢がピンっと伸びる。

鶴丸を引き取ったというからホワイトな主だと思っていたけれど。微妙な違和感を感ずる。そういうえば、薬研も自分の主のことなのに、私が主に対して言い過ぎたのう

れしそうだった。

そしてこの、滝のような雨。本丸の景観は主の霊力を現す。つてことは。

「失礼します」

黒づくめの時の政府の担当と名乗る男が刀剣男士に案内されて来た。

「主様。遅くなつて申し訳ございません」

猫などで声だ。低く腰を下げて手をもんでいる姿だけ見ると役人ではなく商人みただ。だ。

「この女が話をされていた女性で？」

「ええ。そうなの」

主は、私をじろりと見つめると、舌打ちをした。

政府役人は私を一瞥して事情を説明を求めるでもなく、ただ面倒事を引き起こしやがつてというような、冷めた視線だった。

「この女、さつさと連れてつて。私の本丸に女性が二人もいるのは我慢ならぬわ」

「わかりました。すぐに連れて行きます」

何故か手に枷をはめられ、声を上げようとしたのが気に入らなかつたのか、初期刀に猿轡までされた。私は、罪人のように紐で繋がれて役人にドナ・ドナされた。助けを求めようと薬研を見るが、申し訳ねえというような視線だった。私を連れてきた千代金丸

はいないし、鶴丸国永もない。

どうなるってばよ。

第7話

時の政府の建物に連れてこられ白い部屋に入れられた。

3畳ほどのスペースにベッドと入り口横にトイレ。入口は開き戸で施錠されて開けることはできない。窓は一つもなく、音もしなくて。無音だ。

「君がこちらに来た経緯の件について調べる間、この部屋にいてもらう」

連れてきた役人から別の役人に引き渡された。背も体も大きな男性でプロレスラーのような印象。眼光は鋭く疑心にあふれ圧的な物言いに人間性を否定するような口調だ。

隣の部屋から叫び声が聞こえてくる。

「出してくれ。俺がれきししゅうせいしゅぎしやだ」

歴史修正主義者？

悲鳴のような声に紛れて聞こえてくる声は、日本語なのかわからないくらいの濁音が混じっていて。悲鳴が響き渡っていたから拷問されていると確信した。

その声がピタリと聞こえなくなると、人の気配もなくなつた。

膝を抱えながら悪いことばかり浮かんだ。

私の尋問が始まつた。

「君はどうやって本丸に入つたんだ？」

「だから、何度も言つてるじゃないですか。私は別次元にいたんです。そこから千代金丸さんが20××年から私をこちらに連れてきたんです」

「うそを言うなつ！ お前のいた時代にお前という存在は確認できない」

白い研究者っぽい服装の体格のいい男が机をこん棒で名医パイ強い力で殴りつける。

白い部屋いっぱい響く重い音。こんな音を聞いたのはドラマでしかなくて。現実になんかこんなことされるなんて初めてで。そうでなくても男性に恫喝されるといっただけで恐怖しかないのに。涙がこぼれてしまう。

彼らは私が怯えた表情に満足そうな笑みを浮かべた。

何日たつただろう。

「そういつた証拠はない。そろそろ本当のことを言ったらどうなんだ？」

「本当のことを言っています」

「何度も言わせるなっっ!!」

怖い。

男の人の怒鳴り声に、びくびくと肩をすくめる。

「君は歴史修正者なんだろう？」

「違います」

髪をつばられ頬を殴られても認めない。認めたらそこで死刑が確定。間違いない。

隣の部屋の人は言ったとたんになくなった。次の人もそうだった。

「証拠がでているんだ」

「知りません」

証拠？

ねっ造ままでするのか。

「私は無実で潔白です」

「それもいつまでもつかない」

そのうち、電流だと脅された。

歴史修正者に疑われているとは思ってもみなかった。

もしかして、鶴丸国永さんと、同室の千代金丸さんも歴史修正主義者と通じていると思われて捕らえられたんじゃないだろうか？

そうと思えば、私がドナドナされたときいかなかったことに領ける。

彼らも、拷問されているのかもしれない。私が彼らの幸せを願ったせいで、千代金丸さんがこちらに連れてきた。そのせいで二人にあらぬ疑いが掛かって。だとしたら、刀剣男士の彼らは武器だ。もしかして、言霊で縛られ、私より酷い拷問とかされているんじゃないだろうか。

ベッドの隅で膝を抱えながら膝を枕に眠る。横になっていると扉を棒で叩く音で眠れないからだ。

どこかで誰かが拷問されている。その叫び声が館内放送で流される。そうして、次はお前だと心理的に追い詰めていくのだ。

看守が夜中、何度も扉をかかんと叩いて、眠れないようにしてくる。だれか。助けて。

千代金丸さんを、鶴丸さんを助けて。

だれか、だれか、だれか。

鶴丸さん、こんな気持ちだったのだろう。誰も助けてくれない。それでも、堕ちないで欲しいといった私を信じて彼は耐えに耐えて主をお縄にした。

どれだけ、心が強くないとできないことか、自分がそういう目にあつてはじめてわかる。

こんな目にあつても、政府役人を恨まない。そう、眠れないようにしたり、脅したり恫喝したりする彼らを恨まない。

鶴丸に堕ちて欲しくないと言つた私が堕ちるなんて駄目だ。
誰も恨まない。

そう思うたびに、出会つた彼らの顔が浮かぶ。

みんな、どうしてるだろう。

彼らに会つたことは言っていないから、歴史修正主義者に疑われることはない。

けど、色々な刀劍男士に会ったけれども、誰もが何かを心に抱えている刀劍ばっかりだった。死にたくなるくらいではないけれども、辛い、苦しい、と思う心の奥に持っているものを、私が少し聞いて。少しでも心が軽くなったらいいと思つて聞いた。

彼らはしあわせになつただろうか。

鶴丸さんと千代金丸さんは無事だろうか。

朦朧としながらまた今日も尋問。

きつと、この部屋を出るときに私は殺されるのだろう。

ああ。夢でもいい。もう一度だけ、家族に会いたい。

同時に、私と同じ目にあつてゐるだろう二人の刀劍男士の顔が思い浮かぶ。

鶴丸さんと、千代金丸さん。彼らに会いたい。

しあわせになつた鶴丸さんと千代金丸さんに会いたかつた。

出会つた刀劍男士全員に会うのは無理でも、二人に会いたかつた。

もう、どのくらい、ここにいたのかわからない。何日なのか何か月なのか。時間の感覚もない。今は昼なのか夜なのか。わからなくなつた頃だつた。

「(ト)だなぁ？」

男の声が聞こえた。

ドンドンと扉をたたく音にいつものように肩が跳ねる。

また尋問だろうか。

ベッドの中で顔だけ上げると、扉がゆっくりと開いた。

扉の真ん中に鶴丸国永と、その後ろに千代金丸が立っている。

「君っ！ 大丈夫か？」

「やあつと会えたさ」

思わず鶴丸の左腕を凝視してしまふ。なくなっていた左腕はちゃんとあった。

「すまない。こんなことになって、すまなかった」

「君を守れなくて、申し訳なかつたさ」

千代金丸と鶴丸国永が、私のいる監禁部屋に入ってくるなんて。

ありえない。

ああ、これはいつもの夢だ。

まどろむ中で何度も訪れる夢の中にいつもこんな夢があった。
まだ夢を見ているのだろう。

何日も白い部屋い部屋にいたから。こういう夢っていっぱい見たっけ。家族と同じくらい夢にでてきた刀剣男士達。

「ふふ。いい夢だなあ」

クスクスと笑い出す私を鶴丸、千代金丸が不思議そうに見つめる。

「何度も見たんだよ。もう一度会いたいって思ってたら、いつも夢に出てくれて。今日は二人同時に来てくれるなんて、いい夢だなあ」

「何を言ってる？ 俺は本物の千代金丸さ？」

千代金丸の手が私に触れようと伸ばされる。

「だめっ！」

彼の手をよける様に何度も伸ばす手をよける。

「どうしてさける？」

「だって。目が覚めちゃう」

「目覚める？」

「そう、いつも手が触れたりすると目が覚めちゃうの。そしたら、また、白い部屋に一人だけになってしまう。前はね、貞ちゃんが来たの。それで、主様と一緒に洋食たべて

るって行って、ミートスパゲッティ作ったらおいしいって一緒に食べたんだ。でも、フオーク渡したときに手が触れて。それで、消えちゃったの。あれから、夢の中でいろんな刀剣様に会ったけど。でも、私に触れると消えちゃうから。そうすると、また、白い部屋に一人つきりで。誰もいなくて」

「君、大丈夫か？」

鶴丸の手が伸びる。

「だめっ!! 触れないで」

涙がこぼれる。

「千代金丸。鶴丸。お願い。もう少しだけ。もう少しだけ。ここにいて。二人が会いに来てくれた夢を見させて」

千代金丸がひぎを折りベッドの近くまで来て私の瞳を覗き込むように見つめた。

青い綺麗な瞳だった。

この瞳に飲み込まれるように。

この綺麗な海原のように穏やかな瞳の中に吸い込まれるように。

私はこの世界に来たのだ。

「なんくるないさ」

その言葉は、私がここに来た時に聞いた声。夢の中でも何度も聞いた。

「会いに来てくれてありがとう。ここを出るときは、きつと死ぬ時だから。死ぬ前に、二人に会える夢が見れて嬉しかった」

「夢じゃないさ」

ぎゅつと手を握り締められる。

「だめ、消えちゃう」

ああ。消えてしまう。目覚めてしまう。

千代金丸を見つめると、彼は私を連れてきた時と同じ瞳で、包み込むように笑っている。

「夢じゃないから、消えないさ」

抱きすくめられていた。

なんくるないさ

青い青い海原が見えた気がした。
ああ。

ここは。

こちらに来た時に見た海だ。

次の瞬間意識が遠のいていった。

第8話

意識が覚醒して、目を開けると、鶴丸に顔を覗き込まれていた。反対側に千代金丸がいる。

「君？ 大丈夫か？」

白い神様。

「鶴丸？ 千代金丸？」

「そうだ」

私はこの8畳ぐらいの和室の真ん中に布団を敷いて寝かされていた。

起き上がろうとすると、鶴丸が背中に手を当てて、それでも彼は消えなくて。

「夢じゃないさ」

千代金丸に顔を覗き込まれた。

「鶴丸も千代金丸も消えない？」

「ああ、消えない」

「鶴丸左手を見せてもらってもいい？」

「ちやんとあるぜ」

手を挙げてぐーぱーして見せてくれた。顔も綺麗になつてて。ああ、画面でよく見る鶴丸だ。血まみれではない。真っ白白の鶴丸国永だ。

「千代金丸さんはけがはない？」

「ないさ」

「よかつたああああ」

嬉しさに涙が出そうになる。

「心配性だなあ」

「こっちは？」

「一番安全な場所さ。君を連れてきたさ」

顔を横に向けると、ゲーム画面から抜け出たような景色。障子の向こう側に春の桜が満開で時折吹き抜ける風に届けられる花びらが縁側に届けられ、時折ゆるりと吹く春風に時折磯の香りがする気がする。まるで海水浴に来た時のように、それは心地よい微笑の様な温かさを届けていた。

「安全な場所？」

政府施設で歴史修正主義者だと疑われていた私に安全な場所があるのだろうか。

「不思議かい?」

「ええ。だって、私は歴史修正主義者だって思われていたから。政府に保護しては貰えない。あの施設から逃げ出すことができても、指名手配されるって役人が言ってる」

いつも恫喝する政府職員が言っていた。歴史修正主義者は犯罪者だって。私は認めなかったけど、証拠があったから確定だって。私は犯罪者だって。

「ここは千代金丸の神域だけ。本来なら俺の神域に連れてきたかったんだがな。悔しいが、こちらに連れてきた時の千代金丸の神域が君との相性がいいらしいぜ」

「そうみたいさ」

千代金丸が照れ臭そうに笑う。

「え? 神域って? 私神隠しに会ってるの?」

「一時的さ。あの施設から君をさらうためにはこうするのが一番安全な方法だったさ」

「あの後、政府の摘発舞台と政府役人たちと戦闘になったんだ。だから、君を安全な場所に隠した。それが千代金丸の神域なんだ」

「ちよつとまって。戦闘? あそこは政府の歴史修正主義者を収容する施設だよね?」

「そこで戦闘? 何があったの? それに、どうして鶴丸と千代金丸さんはここにいます?」

慌てながら二人を交互に見詰めた。

だって、二人には守るべき主がいるのだ。それなのに、ここにいるのはおかしい。

「あしがちやーだなあ」

千代金丸が仕方ないなあといったように笑ってる。

「そうだな。ちゃんと話そう」

鶴丸が胡坐をかいて座ると、千代金丸も同じように座った。

「俺は、君に会ってから前の本丸が解体されてから、政府所属の刀剣男士になったんだ」

「え？」

「あの本丸は、政府からグレー本丸でマークされていたんだ。尻尾をつかむために俺が先入捜査に入ったんだ。案の定、あの女は刀剣男士を言霊で縛り、担当は刀剣を買い取っていた。千代金丸も別の本丸から奪われてきたんだ」

「違和感を感じてはいたんだ」

「そうか。感じてる奴は多いだろうな。薬研みたいにな」

「薬研も？」

薬研藤四郎は短刀としてはダブリが出やすい刀だと思うけれど。

「薬研は奪われた刀剣じゃなくてだな。もともとあの本丸はあの女に呪具で乗っ取られた本丸で、薬研藤四郎は別の主の刀剣なんだ。あの本丸の刀剣男士はあの女を主だと思

い込まされてる刀剣ばかりでな。彼らは主の性格が変わったと思つて違和感を感じていたつてわけさ」

やっぱり呪具による乗っ取りだったんだ。

「それで、俺が潜入捜査で元の主の居場所を突き止めていたところに君が来た。驚いたぜ。次に君の所に行く刀剣は千代金丸だと見当をつけていたから、千代金丸にいろいろと頼んでおいたんだ。本当に君に会いに行くことができるなんてな。君にあえてすごく嬉しかったんだ。すぐに会いたかったが。君トイレに籠つて出てこなかっただろう?」

「それは、気持ち悪くつて仕方なくつて」

「そうだな。あの女の霊力はグレーだったから、君のいた部屋の新規に馴染んだ君の体にはダイレクトに汚れた霊力が異物として響いたんだろう。だから、君は気持ちが悪くなったのさ」

そうだったんだ。

「それに、君の来たタイミングが絶妙に悪かったんだ」

「どういうこと?」

「あの女の呪術が弱くなつてた所に君が来たんだ。そこで君が、薬研に言つたそうだな?」

「え?」

「人間ごときがつて。薬研が驚いてた。それは、元主が、ことあるごとによく言つてたんだ。それであの女に訊ねたんだ。そういえば、主。昔よく「人間ごときが」つて言つたのを覚えてるかつてね。あの女は、そんなこと言つていないつてキリキリいつものように怒りだした。そこで薬研の呪術が切れたんだ。そういう刀劍男士が多数出た。それから、呪術から覚めた刀劍たちが増えて、薬研は主はどこだとあの女を責め、呪術が覚めていない刀劍はあの女を主だと思つてるんで守ろうとして戦鬪になつた。あの本丸のあの女を信じていた刀劍は折られた。捕まつたあの女は、ここの主を殺したからこの本丸の主は自分だと言ひ出し、怒り狂つた刀劍たちを俺はい冷めたが聞かず、刀劍たちがあの女を切り殺し自身を折つた。監査が突入したころにはあの女は軀となつていて、あの本丸の刀劍はほとんどが刀解。さらわれてきた千代金丸のような刀劍は元主へ戻つたが千代金丸は主が病に死去していた。千代金丸の本丸は解体後だつたために政府直属の刀劍男士となつた」

一氣に聞かされて、驚愕して肩が震えた。

あの本丸はもうないのだ。

あの優しいげな薬研藤四郎も、あの本丸で見た刀劍男士はもうどこにもいないのだ。

「君が氣に病むことはない。あの本丸は黒だつた。どうにかできたなら君が来る前にどうにかできていたさ」

鶴丸が私の瞳を覗き込んだ。

「そうかもしれない。けど。私、あの時……薬研に……」思つたままを口にしてしまった。あの言葉がきつかけになつて人間も刀劍男士も亡くなつたのだ。気にするなというほうが無理だ。

「君には感謝しているさ」

千代金丸が手を握ってくれる。

それは、私を連れてきた時にくれたことだ。

今は安心させようとしてくれているのが伝わる。

「千代金丸は、俺が事情を話していたから、戦鬪になつた時に俺と一緒に監査の刀劍男士と鎮静に加わっていたんだ。今の千代金丸は本来の主の元の墓参りができた」

「そうさ。だから、君が言った言葉は俺を助けた」

「でも、それでも」

きつかけを与えたのは私だ。

「きつかけだったかもしれない。だが、呪具はいつか効力が切れるものだ。遅かれ早かれあの女の末路は決まっていた。君が気に病むことはない」

鶴丸が千代金丸に握られていた手を奪うように私の手を握る。

鶴丸の言葉にも千代金丸の言葉にも納得はできても心から頷くことはできなかつた。

「薬研藤四郎の遺言だ」

びくりと肩が跳ねる。

恨み言だろうか。それとも、非難の声だろうか。

どう言われても受け止める。それが、本丸をなくした原因の私の責務だろう。

背筋を正して、鶴丸を見つめると、彼もちゃん正座して手をつないだまま私を見つめている。

「ありがとう」

え？

恨み言ではなかったのか？

顔に書いてあったのか、鶴丸は苦笑った。

「主の為に戦って折れるなら本望。嬢ちゃんは優しいから気に病むかもしれないねえが。思
い出させてくれてありがとう」

「薬研……」

「本当に君は自分以外の心配ばかりだな。それが君のいいところだが」

「そうだな。君も体がぼろぼろなのにさ」

「それでも。私はまだ生きているもの。だから、やり直しはできるから」

「それなら、薬研もそうさ。あいつは刀解されたから還っただけさ。暫く休むかもしれないが、やり直すだろうさ」

薬研は、還ったんだ。堕ちなかつたんだ。そのことにホッとする。

「そろそろ、帰ろう。君の体の状態を診てもらわないとな」

「戦闘は終わったさ。キミに会いたがつてる刀剣は俺達だけじゃないさ」

「しっ、千代金丸、驚かせる約束だろう？」

「そうだった」

二人はアイコンタクトしながら笑っている。

「じゃあ、帰ろう」

私の返事を待たずに、瞬きする間に景色が変わる。途端に意識が遠のく。

*

気が付けば、白い天井。

あの、施設と同じ、白い、白い……。

今までのことは夢だったのだろうか、頭の中がぐるぐるする。

手が強く握られ、目の前に顔のドアップが。

覆いかぶさるように私の顔を覗き込んでいるのは、あの、鶴丸国永。強く手を握りつたままベッドわきの椅子に腰かけながら眠っているのは長い青い髪の千代金丸さんだ。

「気が付いたか？」

こくりと頷く。

ふと気づけば、手に包帯がまかれていて。腕には管が。病院、何だろうか？

「ここは、政府の病院だ」

怯えた表情をしたのは致し方ないと思う。だって、ずっと、歴史修正者だと決めつけられて政府には罪人扱いされていたのだから。

「大丈夫さ。君は俺たちの恩人だ。歴史修正主義者じゃないと証明されている。ゆっく

り眠ってくれ」

そういわれても、怖くて。

「すぐに良くなるさ」

気が付いたのか強く手を握られて千代金丸が鶴丸と一緒にのぞき込んでいる。

後ろから声がかけられる。女性の声だ。

「すみません。起きられたのですね。診察をいたしますのでしばらくお待ちくださいね」

診察が不安ではあったが、同じ同性ということもあつて素直に診察を受けた。

白い服を着た小柄の女医さんだった。二人とも手を強く握ったままなかなか出ていかなかったが、すぐに終わりますからと、部屋から追い出されていた。強い女医さんだ。

診察は無事に終わり、体は前の施設での傷は順調に回復中だそうで、あちこちに包帯がまかれている。

「もう終わった？」

ぴよこりとドアから顔を出したのは、今剣だった。

「え？」

「ええ終わりましたよ。皆さんお待たせしました。入っても大丈夫ですよ」

皆さん？

はてなマークを浮かべながら、ベッドから起き上がり女医越しに扉をみると。

「よかつたあああ。意識が戻つたつて聞いて駆け付けたんだよ」

「よかつたです」

「じゃーん。来ちゃつた」

たくさんの刀剣男士たちが部屋になだれ込んできた。

「えええ？」

「みんな君を探していたんだぜ」

最後に入ってきたのは鶴丸国永と千代金丸だ。

「どう、して」

「彼らを覚えているかい？」

「もちろん」

彼らは、私の家に来たことのある刀剣男士だ。全員ではないけれども。かなりの人数がこの病室を埋め尽くしている。個室でよかつた。

「俺が君を助けるために呼び掛けたんだ。君に助けられたことある刀剣男士は君を助けるために助力願うと。そして、あの、神域ができて、君を救うことができた」

「そうさ。あの神域は俺と鶴丸だけじゃなく、皆で作り上げたものさ」

「施設での奪還時も戦闘で助けてもらったんだぜ」

鶴丸と千代金丸が言うのと、刀劍男士たちがうなずいてたり、そうだぜつといった声がかかる。

みんなが協力して私を助けてくれたのか。

すべて別本丸の刀劍男士だということはわかつている。だから、それぞれ自分の審神者さんに了承をもらって、見も知らない一般人を助けに来てくれたのだ。

「ありがとう。主さんにも、感謝の意をお伝えください」

「本当に、助けてくださり、ありがとうございます」

あの施設から助けてもらったのだ。なんてお礼を言えばいいのか。あのまま死んでしまうと覚悟していた。もう、だめだと。覚悟してた。

彼らが私を助けてくれたのだ。

ベッドに座りながら深々と頭を下げる。

「何言ってるの。助けてもらったのは僕のほうさ」

「そうだよ。ぼくもだよ」

次々に彼らの口からそんな言葉が伝えられる。

彼らが私の家に来るときには、悩み事を持った刀劍男士が多かった。彼らは主さんとうまくいったらしい。それを私のおかげだと思っっているようだけれど。それは違う。

私は助言はしたと思うけれど。それだけだ。それを行動に移すかどうかは、刀劍男士次第なのだ。私に感謝するのは、違う。それを行動で来た彼らこそが、すごいと思う。

「私は、何もしていません。問題を解決できたのは、あなた方の強い意志があつての賜物。私の力ではありません」

「そういう君だから、こちらに連れてきたく……」

どこかの刀劍男士のつぶやきが聞こえた気がした。

「さて。じゃあ、今日はここでお開きにしよう。なんせ、起きたばかりなんだからな」

鶴丸の一声で、解散していく。

「じゃあまた来るね」と何振りからも声がかかる。

「はい。お待ちしております」

と、答えると安心したように彼らは本丸へ帰っていった。

数日後には、政府役人からの謝罪があり、（黒服の人が鶴丸と一緒に来た）

その時に、今後のことを告げられた。

やはり、元の世界に戻るのは無理なのだそうだ。千代金丸はこちらの世界に来るときに、私を彼の神域に一度入れて、こちらに連れてきた。それは、神域という龍脈につながる接着剤があるからこそできることで。こちらからその龍脈に干渉はできないらしい

い。高次元の存在は低次元からは接触できないのだそうだ。

あれから。

「君の意思を無視して連れてきたこと。すまなかった」

鶴丸からは謝られ。

「俺のさ、い、い」

千代金丸も罪悪感を感じているらしい。

「二人とも悪くありません。私が、おこがましいことを言つたせいですみません」

ほんとに。神様に幸せになってほしい、だなんて。人間のくせに生意気すぎる。

二振りはそれでも、色々と私の身の振り方に相談に乗ってくれて、就職先も彼らの紹介で政府所属の万屋で仕事をさせてもらえることとなった。住居や諸費は政府もちだと掛け合ってくれたのも彼らだ。

あれから、数か月。

時々、あの刀剣男士も訪ねてきては話をするかもしれない。しばしば。

鶴丸はそういう話をするとなぜだかいい顔をしないが。千代金丸は自分のことのように、私がかうれしいと感じたことを話すと、彼も嬉しそうに聞いてくれる。

「じゃあ、今度はもつといい驚きを君に届けよう」

「鶴丸はリンチャーだなあ」

方言がよくわからないが。千代金丸はほんわかしていて。鶴丸とはいいコンビのようだ。

私も職場で話す人もできて、前の職場よりいい人間関係が築けるようになって。これも神様のおかげかもしれない。

「二人とも、いつもありがとう」

そういえば、

「また来るぜ」

「またやーさい」

今まで生きてきた世界に帰れないのは、一度死にかけて諦めがついていた。だからこそ、彼らが望む、こちらの世界で一緒に生きるという選択一択になって、帰ってよかつたかもしれない。そうでなければずっと悩んでいただろうから。

「うん。またね」

手をひり二人を見送る。

審神者でもなく、彼らの傷を治すこともできない一般人だけれど。

話をするだけで心が軽くなるんだと、千代金丸が言っていて。鶴丸はそれは、だな、とか何とか言いながら照れくさそうにしていたっけ。

神様の相談相手っておこがましいんだけど。

それでも、二人に出会えてよかったと思う。

完